

乾燥地を拓く

5

鳥取大学ITPだより

昨年11月末から、大学院修士課程の川口子葉さんが、シリアにある国際乾燥地農業研究センターで研究を行っている。彼女は国際機関への就職を目指す優秀な学生さんである。私は彼女の指導教員として、シリアにいる川口さんにアドバイスをしたり、彼女の研究が首尾よく進むように現地の指導教員と打ち合わせを行ったり、時には実際にシリアへ赴いて指導を行っている。ちなみに、

圃場内をヒッチハイク

—— 研究に励む優秀な学生 ——

彼女の現地での指導教員は、イラン人とエチオピア人の研究者である。本当に国際的な環境である。

シリアでの研究環境は、彼女が日本で思い描いていたものとは少々勝手が違ったようである。まず研究圃場のスケールがどでかい。この研究センターの圃場は約1千畝もあり、彼女が研究対象地としている圃場だけでも約25畝(約7万5千坪)はある。決して歩いていける距離ではなく、ひとりでたどりつけるかどうか……。

川口子葉さん(右)と彼女の研究を手伝う研究助手(4月、国際乾燥地農業研究センターの圃場で)。このころ、シリアは小麦の収穫を迎える季節



そこで、彼女は麦わら帽子をかぶり、圃場内を歩き来している作業車を日々ヒッチハイクして、ようやく自分の研究サイトにたどり着く。

この大きな圃場で、彼女は病害虫、特に収量に大きな打撃を与える寄生センチュウ類に関する研究を行っている。センチュウの大きさはミミズよりも小さく、彼女の調査には顕微鏡が欠かせない。

しかしシリアの研究センターには、センチュウを観察できる顕微鏡がない。困った。だがこのような状

況でも、彼女はあきらめない。自分でじっくり考えて、今の環境でできることを行う。
また、これは当然ではあるが、研究センターでは日本語を話す機会など全くない。研究者とは常に英語で話す。英語の通じない現地の人々とは、電子辞書を片手にアラビア語といった感じ。毎日が緊張の連続である。

ヒッチハイクして自分の圃場まで乗せてもらうようなテクニクも身につけ研究に励む川口さん。どんな状況にも適応できる力を、自分の経験から身に付け、一步一步国際的感覚を養っている。

(鳥取大学農学部准教授 西原英

治)

(月1回掲載)